1989　秋の特別展　　1989年10月7日～11月26日

『むかしの農具』展

～農具から見る先人の生活の知恵と工夫～

展示解説

神戸深江生活文化史料館

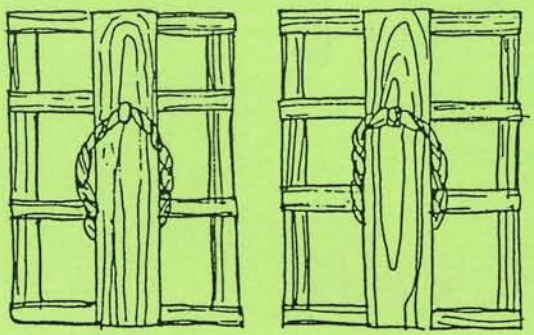
開催にあたって

館長代行　大国　正美

米は昔から日本人にとって大切な食物でした。稲作が日本に伝わってから、日本人は長い間かかって、工夫をこらして稲作作業に使う農具に改良を加えてきました。農具改良の足跡は、労働上の苦労を減らし、より多くの収穫を得ようとする農民たちの歴史だと言い換えることができると思います。

その長い歴史を根本から変化させたのが、高度経済成長でした。田や畑は次々と姿を消し、その一方で、農具の極端な機械化が進みました。その結果、農作業の工程も大きく変わりました。

農具がわたしたちの生活から遠くなる今、近代の農具を展示する企画展を試みました。一年間、どんな農作業が行なわれたのかを農具で再現し、生産向上に心血を注いだ先人の生活の知恵と工夫をたどってみたいと思います。



〈目　次〉

開催にあたって

農具のうつりかわり……1

米づくりの一年

①耕作……2

②田植……3

③管理……4

④収穫……5

⑤脱穀・調整……5

展示資料目録……8

あとがき……9

農具のうつりかわり

二千数百年前に、日本に稲作がもたらされてから今日に至るまで米は日本人の主食であった。日本人が、現在のような国土面積の割に人口が多いことも、他の穀物に比べて、同じ面積に対し収穫率の高い米が主食とされてきたのが大きな原因となっている。

「農具」という言葉を辞書で引いてみると、「農耕に使用する器具・農器」とでている。ここでは、稲作に使用された農具にしぼってみよう。

そもそも、わたしたちはいつごろから農具を使い始めたのだろうか。それには稲作の開始がいつか？ということになるのだが、これには意見が分かれていて、縄文時代の終わりには開始していたという考え方と、弥生時代になってから稲作は開始したという考え方がある。しかし、一般的に稲作農耕が全国的に定着したのは弥生時代に入ってからではないかと思われる。農具も稲作の開始とともに使用されていたと思われ、弥生時代の遺跡からはさまざまな農具が発見されている。そのうちの一つに石庖丁がある。これは稲の穂をつみ取るために使われたもので、大半は石でできているが、中には貝や木のものもある。

稲作農耕が大陸より伝わったころ、金属器もほぼ同時に伝わってきた。金属器には二種類あり、青銅器と鉄器がある。青銅器の方は主に祭祀用の道具に使われ、鉄器の方は武器・工具・農具などに使われた。だが、農具としての鉄器は発見数から見ると、弥生時代も半ばをすぎてから普及したようである。そのため、稲作開始時の農具は木製品が多く見られる。鍬や鋤は現在の原型と思われる形で多く発見されている。他にも田舟・田下駄などが弥生時代の遺跡から発見されている。また、このころの脱穀する際の農具として、竪杵と臼が使われていた。神戸の桜ヶ丘出土の銅鐸にその様子が描かれているものがある。

古墳時代になると、ますます鉄器が普及し、石器が見られなくなる。鍬などは刃先に鉄を使用するものが多くなる。木製品に比べて作業の効率も、また農具の使用期間の長さも向上したことだろう。

奈良時代に入り、各地で荘園が出現すると大規模な稲作が始まり、多くの収穫をあげるべく、農具の改良･工夫がなされるようになる。また､人力で行なっていた耕作も、畜力で行なうようになった。床のついた犂を牛馬に引かせて水田耕作をするのがその例である。

江戸時代になると経済の基が米となり、より一層収穫をあげる努力を行ない、農具そのものも大型化するようになった。除草する農具も雁爪から回転式除草器になり、調整具もふるいから唐箕へと、一度にたくさんの処理ができるように改良されていった。

また、備中鍬にみられるように、農具の改良もさかんに行なわれ、各地の農具研究も進み、大蔵永常の『農具便利論』のような書物も出版された。

今日では、畜力から動力を利用した農具が大半を占め、耕運機が牛馬に代わるようになった。また、田植・稲刈などの作業も人の手から動力機械へと変化していったのである。さらに、一度に稲刈と脱穀を行なうコンバインのような機械も見られるようになった。

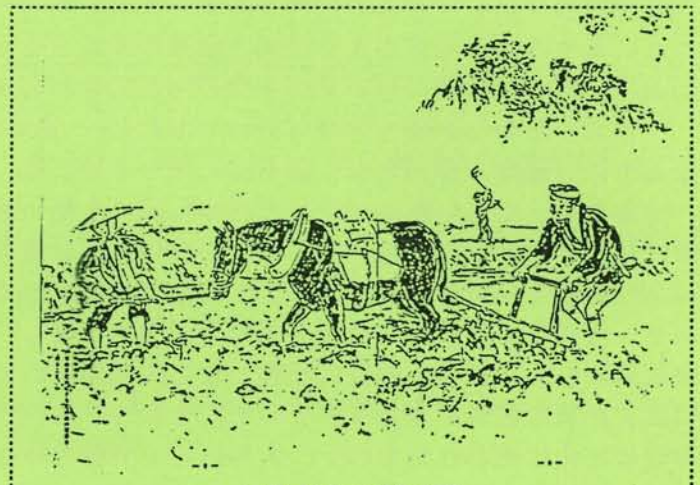
以上のように、時代とともに農具が変遷していく様子を見てきた。現在の農業は、機械の時代となり、千歯こきや唐箕などの手作りの農具は過去の遺物になろうとしている。しかし、それらの農具を生み出した人々の創意や工夫、あるいは農具を使用し、汗を流してきた人々の苦労は忘れてはならないだろう。　　（望月　浩）

米づくりの一年

① 耕作－田をこしらえる－

４月ごろに俵に入れた種もみを１週間～10日ぐらい水につけ、それと並行して苗代（稲の種をまき、苗に育てる田）作りを行なう。発芽した種もみは苗代にまき、苗の成長を待つ。

その間に水田では苗を植えやすくし、また発育をよくするために荒おこし、代かきの作業を行なう。この作業には、鋤・鍬・犂・代かき鍬などの人力・畜力（牛や馬）による農具が使用された。



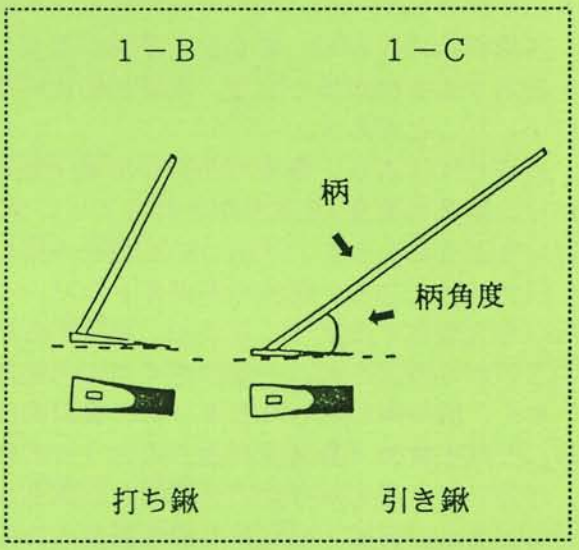
“代かきの様子”

〈鍬〉　☆１－Ａ・１－Ｂ・１－Ｃ

鍬（くわ）は、主に田畑の土を砕いたり、掘り起こしたりするのに用いられ、現在でも使用している農家は多い。機能的には、土を手前に引き寄せる働きをするため、柄と刃先との角度の違いが各土地の土質によって大きく異なっていた。

そして柄角度の60°～85°ぐらいのものを打ち鍬（深耕用）30°～40°ぐらいのものを引き鍬（浅耕用）に区別し、その中間を打ち引き鍬と呼ぶ。鍬は昔から“一里違えば鍬が違う”といわれるように、使用する地域の土質の違いによって、柄角度の違いが決まったようである。

また構造上としては、平鍬（風呂鍬）が一般的であるが、江戸時代ごろには鉄の刃先が３～４本になっている備中鍬が普及した。これは、刃先に土の付着が少ないため、粘土質の土壌（どじょう）の耕作に便利であった。



展示資料では、１－Ａは刃先全体が鉄になっている金鍬である。これは木の株起こしなどの際に重宝がられ、荒地の開拓には欠かせないものであった。１－Ｂは柄角度のある打ち鍬で、硬い土質の場所で使用し、１－Ｃは柄角度のない引き鍬で、柔らかな土質の場所で使用した。

〈鋤〉　☆１－Ｄ・１－Ｅ

鋤（すき）は、スコップと同じように直線的に土中に刃先を突っ込んで耕す農具で、深く耕すときに便利な農具であった。しかし、現在の農家ではほとんど使用されていない。

構造上からは２種類に分けられ、１つは京鋤・関東鋤などと呼ばれるもので、鋤身に対し直線的に柄がついたものである。(１－Ｄ)もうひとつは、踏鋤と呼ばれるもので、鋤身に鋭角に柄を取り付け、鋤身に足をかけてテコの原理を利用した農具である。(１－Ｅ)

〈犂〉　☆１－Ｈ・１－Ｉ

牛馬を利用して田畑の耕起に使用した犂（すき）は、犂床の形態から無床犂・短床犂・長床犂に分けられる。

無床犂は、犂床が短小でほとんどないものである。深く耕すことができたが、使用時の安定性がないのが欠点であった。逆に全体に大型で安定性のある長床犂は、犂床が長いため耕深の調整ができないのが欠点であった。（１－Ｈ）

そして、その両者の欠点（耕深の調整・使用時の安定性）を補うものとして、改良されたのが短床犂で、明治期から大いに利用された。耕耘機（こううんき）が普及するまで活躍を続けた。

展示資料の１－Ｉは、短床犂で三重県で製作された「高北犂」と呼ばれるもので、全国的に普及した。

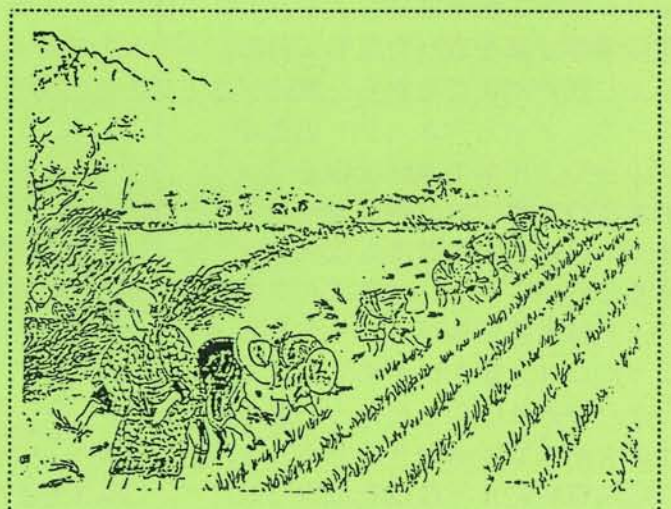
（なお、主に西日本では牛、東日本では馬に犂をひかせていた。）

〈代かき鍬〉　☆１－Ｇ

マンガ（馬鍬）とも呼ばれ、土の固まりを細かく砕く農具で、畜力を利用したものである。

②　田植－田にイネを植える－

６月ごろ（現在では５月が多い）、苗代で育った苗を水田に植えかえる田植の作業が行なわれる。決められた期間に行なうため、各家が共同して行なった。現在行なわれている正条植え（規則正しい間隔で苗を植える方法）は、明治ごろから普及した。それに使用された農具としては、田植定規・田下駄・モッコ・田植縄などがあった。また、田植の終わった後は、サナブリ（注１）という、田の神を送る行事が行なわれた。（一般に田植は女性－早乙女－、苗運び



“田植の様子”

は男性の手によって行なわれた。地域によってはその逆の場合もあった。）

〈モッコ〉　☆２－Ａ

モッコとは「持ちカゴ」から転じた言葉といわれている。持ち運びをする時には、ムシロの四隅に縄をつけて、かつぎ棒につるし、土や苗などを運んだ。そのほかに土や苗を運搬する農具としては、苗カゴなどもよく用いられた。

〈田植縄・田植定規〉　☆２－Ｂ・２－Ｃ・２－Ｄ

正条植えを行なうために使用されたもの。田植え定規を地面にあて、田植縄をはり、同じ間隔で苗を植えた。

（注１）　サナブリ（サノボリ）

農作業の変わり目には、数多くの行事(稲作儀礼)が行なわれるが、このサナブリもそれらの行事の一つである。サナブリは田植という重労働な作業の後に、無事終了を祝って行なわれる行事である。多くの家庭では一日仕事を休み、植え残しの苗を神棚や三宝荒神に供え、赤飯などで祝ったりし、あるいは、村中でよって宴会などを開くこともあった。

このように、サナブリなどの行事や、実りを喜ぶ秋の祭りなどは、苦しい労働をしてきた人々にとって、一つの心の安らぎの場であったに違いない。

③　管理－イネの世話－

田植の後、イネの成長を守るため、水の管理・除草・害虫の駆除などの作業が行なわれる。時期が夏の炎天下に行なわれたので、非常につらい作業であった。水の管理には、踏車・竜骨車（りゅうこつしゃ）・水桶、そして除草には、除草器・雁爪（がんづめ）などの農具が使われた。

〈除草器・雁爪〉　☆３－Ａ・３－Ｂ・３－Ｃ・３－Ｄ・３－Ｅ・３－Ｆ

除草は、イネ以外の雑草を取り除く作業のことである。大昔は、直接素手で草を取ったりしていた。しかし江戸時代ごろから、雁爪（３－Ｄ・３－Ｅ・３－Ｆ）の出現によって、イネの無駄な根を切って成育を促す中耕の役目を果たすようになり、明治ごろにはかなり普及した。その後、回転式の爪を持った除草器が各地で用いられるようになり、腰をかがめて作業を行なわなければならなかった雁爪は姿を消していった。

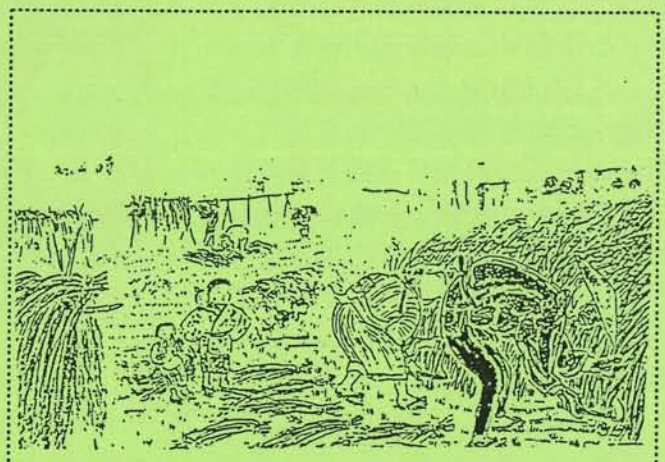
“踏車を使用している様子『農具便利論』より”

展示資料の３－Ｃは八反取（はったんどり）といって、水田の水を少なくしておき、泥土の上を前に押したり後に引いたりしながら、泥土の上をこすって

草を取ったものである。３－Ａの除草器は、円筒状の胴に湾曲（わんきょく）した爪がいくつかつき、水田の中で押すことによって胴が回転し、爪で除草するもので、回転式除草器といわれるものである。

④　収穫－実ったイネの刈り取り－

10月ごろ、稲穂（いなほ）に実りができると、いよいよ稲刈が始まる。鎌などによって刈り取られた稲穂は、丸太を組んだ稲木にかけ、日光と風によって充分かわかす。この乾し方も、家の形に積み上げたりするなど、地域によってさまざまな姿がみられる。



“稲刈の様子”

〈鎌〉　☆４－Ａ・４－Ｂ

鎌は刃部の基本形態から、刃鎌・鋸鎌に分けられる。刃鎌は直角に近い柄付角度を持つもので、昭和10年ごろまで多く用いられたが、その後は刃にギザギザのついた鋸鎌が急速に普及した。展示資料４－Ａ・４－Ｂは刃鎌の類である。

〈稲刈機〉　☆４－Ｃ

昭和20～30年代には柄が長く、ハンドルで刃先を操作する稲刈器（前に押しながら、手元のハンドルを握ると先端部の金具が適当な量の稲を押え込み、押す力が鎌に加わり草を切る。）なども登場した。しかし、昭和30年代後半から出現したコンバインなどの動力機械にすぐ主流を占められるようになり、あまり普及しなかった。

〈石庖丁〉　☆４－Ｄ

稲作が始まった弥生時代には、石庖丁と呼ばれる石器を使い、（中には石以外の素材のものもあった。）稲の穂首（ほくび）だけをつんでいた。しかし古墳時代ごろから、鉄鎌の出現により、稲の根元を刈り取るようになった。

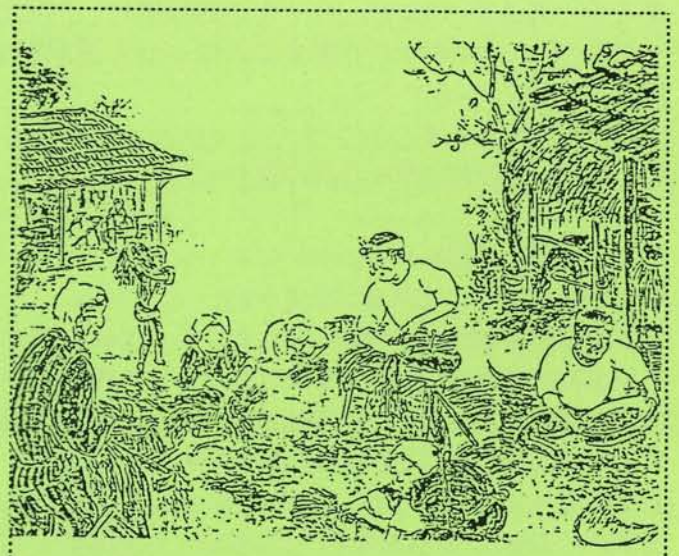
⑤　脱穀・調整－イネからコメに－

刈り取られた稲は千歯にかけて、稲穂から籾を取り出す。取り出された籾（もみ）は、わらくずやゴミも入っているため、箕・唐箕（とうみ）などによって選別を行なう。選別されてでてきた良質の籾は、今度は土臼を用いてもみがらと玄米に分け、最後に千石とおしにかけて（または唐箕）玄米やもみがらに選別する。そして選別された玄米は、斗升（

とます）やジョウゴなどを用いて、俵につめて出荷された。

〈千歯こき〉　☆5－C・5－D

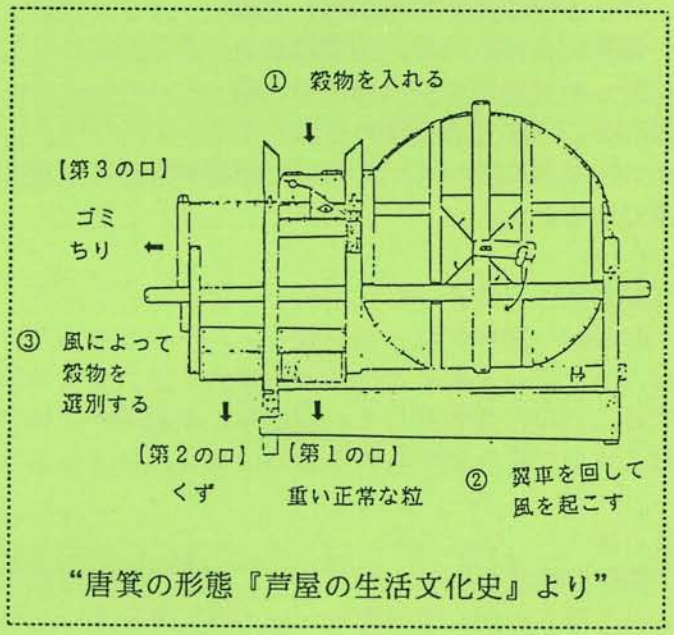
稲穂から籾を取り出す稲扱きの作業は、昔は扱箸（こきはし）という二本の竹の箸を使って行なっていたが、千歯こき（江戸時代～）の出現により取ってかわられた。千歯こきは、たくさんの刃を持つところから、千歯、一度に千把もの稲を扱けるので、千把こきなどと呼ばれた。大正時代に足踏み式脱穀機が普及するまで全国で広く用いられた。



“千歯こきを使用している様子”

〈唐箕〉　☆5－A

唐箕は、その名の示すように中国から伝わったもので、江戸時代中期から使用されだした。それ以前は箕を使っていたが、性能の良さから全国で広く使われるようになった。唐箕は、実の入った籾ともみがら・ゴミなどを選別するのに用いられた。使用法は、翼車のハンドルを廻すことによって風を起こし、その風力でジョウゴから落下する籾などを第1の口（重い正常な粒）、第2の口（くず）、第3の口（ちり）へとそれぞれ選別する。翼車廻しは、早すぎたり、おそすぎたりすると、うまく選別できなかったので、年配者が行なったという。展示資料5－Aは“大阪農人橋”の墨書名（注2）が入っている、貴重な資料である。



“唐箕の形態『芦屋の生活文化史』より”

〈千石とおし〉　☆5－B

唐箕とともに中国から伝わってきたもので、土臼で摺った玄米ともみがらを選別する農具である。形は、穀物を流し込む漏斗部と傾斜のついたふるいからなりたっており、ふるいの部分で、籾の大小により選別した。一度に千石通すことができるというので、千石とおし、あるいは万石とおしという名がついたといわれている。

〈箕〉　☆５－Ｅ

脱穀された穀物のくずを除くために使用したもので、両手で持って上下にゆさぶり、自然による風の力でくずだけを飛ばした。

〈一斗升〉　☆５－Ｆ

米を俵につめるとき、計量を行なうために用いたものである。入れ方や入れた後のならし方によって、計量に微妙な差がでたので、注意深く行なわれたという。（むかしは重量でなく、体積で計量した。）この一斗升の四杯分で一俵の米になった。

（注２）紀年銘のある農具

民具の中には、その民具を収納している箱、あるいは民具にある製作者の名前や、製作年月または買い入れたものの氏名、購入年月日が焼印や墨書などによって記入されている場合がある。

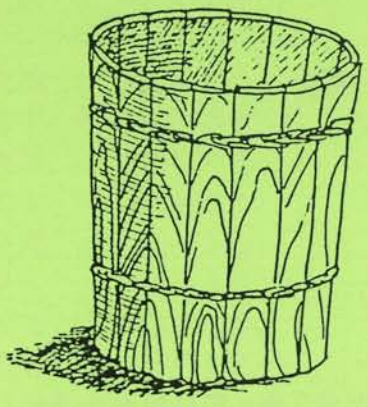
これを特に民俗学では「紀年銘民具」と呼んでいる。「紀年銘民具」は、聞き書き調査によって、製作年代などがわからない場合でも、紀年銘などからその民具の製作年代･使用年代を知ることができる。よって、民具を研究するものにとっては、紀年銘は非常に重要な研究材料の一つなのである。

〈ジョウゴ〉　☆５－Ｇ

俵に玄米を入れるときに、外にこぼれないようにするため使用した。

（望月友二）

※本文４～９頁の出典の書かれていない挿図は、農山漁村文化協会の『ふるさとを見直す絵本』から転用したものである。



展示資料目録

1．耕　作	☆1－A	鍬（金鍬）	不　詳
	☆1－B	鍬（平鍬）	兵庫県養父郡八鹿町
	☆1－C	鍬（平鍬）	不　詳
	☆1－D	鋤	兵庫県養父郡八鹿町
	☆1－E	鋤（踏み鋤）	不　詳
	☆1－F	畝引	不　詳
	☆1－G	代かき鍬	兵庫県養父郡八鹿町
	☆1－H	犂（長床犂）	姫路市広畑
	☆1－I	犂（短床犂）	兵庫県淡路島
2．田　植	☆2－A	モッコ	不　詳
	☆2－B	田植縄※	西宮市神明町
	☆2－C	田植縄※	西宮市甲子園口
	☆2－D	田植定規※	不　詳
3．管　理	☆3－A	除草器（二枚羽）	兵庫県淡路島
	☆3－B	除草器（クサカキ）	不　詳
	☆3－C	除草器（八反取）	不　詳
	☆3－D	雁爪※	西宮市芦原町
	☆3－E	雁爪※	西宮市上ヶ原三番町
	☆3－F	雁爪※	西宮市菊谷町
4．収　穫	☆4－A	鎌	神戸市東灘区本山中町
	☆4－B	鎌	神戸市東灘区本山中町
	☆4－C	稲刈機	兵庫県淡路島
	☆4－D	石庖丁（藤川祐作氏蔵）	神戸市東灘区坂下山遺跡
	☆4－E	石庖丁（大機　勝氏蔵）	尼崎市武庫庄
5．脱穀･調整	☆5－A	唐箕	芦屋市西蔵町
	☆5－B	千石とおし	兵庫県養父郡八鹿町
	☆5－C	千歯こき	芦屋市西蔵町
	☆5－D	千歯こき	芦屋市西蔵町
	☆5－E	箕※	西宮市大井手町
	☆5－F	一斗升	神戸市東灘区深江本町
	☆5－G	ジョウゴ	兵庫県養父郡八鹿町
	☆5－H	竪杵（藤川祐作氏蔵）	不　詳

※は、西宮市立郷土資料館から借用したものです。

あ と が き

われわれが使っているさまざまな道具は、日々変化しています。より楽に、より簡単に、より一度に、いろいろな改良・工夫を重ねてきました。今回展示した農具からも、そのことがよくわかると思います。先人の知恵と工夫そして努力があって、現在のわたしたちの生活があることを忘れてはならないと思います。

最後になりましたが、本展開催にあたり資料提供などのご協力をいただいた西宮市立郷土資料館を始め、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

〈参考文献〉
・『図説　民俗探訪事典』／大島暁雄／山川出版社／昭和58年
・『大阪の民具民俗志』／小谷方明／文化出版局／昭和57年
・『図録・民具の基礎知識』／宮本馨太郎／柏書房／昭和54年
・『農具』／飯沼二郎・堀尾尚志／法政大学出版局／昭和51年
・『民具研究ハンドブック』／岩井宏實他／雄山閣／昭和60年
・『農耕用具コレクション展図録』／松本市立博物館／昭和59年
・『わがまち茨木－民家・民具編－』／茨木市教育委員会／昭和61年
・『尼崎の農具』／尼崎市教育委員会／昭和60年
・『芦屋の生活文化史』／芦屋市教育委員会／昭和57年
・『学習参考展・むかしのくらし』／伊丹市立博物館／昭和62年
・『稲と鉄』日本民俗文化大系第三巻／森浩一他／小学館／昭和58年
・『岡山の民具』／鶴藤鹿忠／日本文教出版／昭和62年

〈協　力〉
・西宮市立郷土資料館

〈編集・レイアウト〉
・望月　浩

１９８９秋の特別展
『むかしの農具』展　展示解説
１９８９・１０・７　第１刷発行
編集・発行　神戸深江生活文化史料館
神戸市東灘区深江本町３－５－７
☎（０７８）４５３－４９８０